

# 児童・生徒に焦点を当てたエスノグラフィー研究の系譜 —体育科教育学で用いる意義を問う—

岩田 昌太郎・敖敦 其其格\*・奥川 聖純\*\*・檜垣 侑揮\*\*・  
松本 ミユ\*\*・村上 遥菜\*\*・沖津 善\*\*\*

(2021年12月6日受理)

A Genealogy of Child-Focused Ethnography Research  
: Questioning the Significance of its Use in Pedagogy of Physical Education

Shotaro Iwata, Aodun Qiqige, Kiyomasa Okugawa, Yuki Higaki,  
Miyu Matsumoto, Haruna Murakami and Tadashi Okitsu

Abstract: This study aimed to organize and examine the trend of ethnographic research in education and its use in physical education pedagogy. The results clarified the following points. First, ethnography in education can be applied to describe a wide range of events related to children from the micro to the macro levels; Second, it can be used in physical education pedagogy to approach problems that are difficult to visualize, such as "educational disparities" in physical fitness and disparities in interest regarding exercise, from an academic perspective. Ethnography in physical education pedagogy can be used to investigate the root causes of children's dislike of physical education and exercise, and clarify issues that are not easily revealed, such as dealing with children who do not want to be talked about in terms of gender in physical education, that is, gender binaries. This can be done by observing and analyzing children.

Key words: physical education, ethnography, qualitative research, literature review

## 1.はじめに

ここ数十年間、日本の教育・医療・心理・社会分野では質的研究の高まりの中で(柴田, 2006), 質的研究法を紹介した関連の図書が多く出版されている。また, 論文, 図書・雑誌や博士論文などの学術情報で検索できるデータベース・サービスである CiNii Articles (NII 学術情報ナビゲータ; 以下, CiNii と記載) で, 「質的研究」(2021.11 月現在) と検索すれば 3800 編以上の論文や報告書等がヒットする。さらに, 教育分野に限定して概観してみると, 「質的研究」を論文のタイトルに最初で使用しているのは岩川(1989)「授業における相互作用の質的研究」であった。その論文の中では, 数量的分析に関する様々な批判をイギリス

の Delamont & Hamilton (1976) の 6 つの問題点<sup>注 1)</sup>を紹介しながら研究方法について言及している。その論文から約 35 年の月日が流れ, さまざまな分野で質的研究という手法が開発かつ適用されながら有益な研究が蓄積されてきた。

教育分野における質的研究といっても, そのタイプには様々な質的調査法が存在する。メリアム(2004)は, 主な質的調査法のタイプとして, ①基本的または一般的, ②エスノグラフィー, ③現象学, ④グランデッド・セオリー, ⑤ケース・スタディと 5 つのタイプでまとめている。そして, その中でも②エスノグラフィーという手法は, 文化人類学(Spradley, 1980)を皮切りとして, 社会学(e.g., 佐藤, 1984; 志水, 1985; 阿部, 2006)・心理学(e.g., 箕浦, 1999a, 1999b; 村本, 2006)・

\*広島大学大学院人間社会科学科博士課程後期, \*\* 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期, \*\*\*広島大学大学院人間社会科学科教育研究補助職員

医学/看護学 (e.g., 黒田, 2011) は言うまでもなく、教育学・保育学 (e.g., 上田ら, 2001; 柴田, 2006) など、人間を対象とする研究分野における共通の研究手法となりつつある。ただし、エスノグラフィーという語は、フィールドワークやケース・スタディ、参与観察あるいは質的な調査などと互換的に使用される時に混乱や誤解を生みやすいという (メリアム, 2004, p.19)。そこで、まずはエスノグラフィーの定義や意味、そして特徴や具体的な手法について概念の整理を試みたい。

第1に、エスノグラフィー (ethnography) は、ギリシア語の *ethnos* (民族), *graphein* (記述) から来た英語で、「民族誌、民族誌学」と訳されていることは周知の事実である。そして、一般的に「エスノグラフィー」という言葉は、「特定のフィールドについて記述した報告書」と「報告書を生み出すための研究手法」という2つの意味で使用されることが多い (LeCompte & Preissle, 1993)。そのため、前者は、上述しているように研究の成果としての「民族誌」と表現され、後者は研究手法としてのエスノグラフィーを示している (柴田, 2006)。なお、エスノグラフィーの派生や源流、そして古典的なエスノグラフィーやポスト・エスノグラフィーなどといった史的な解釈については、デンジン・リンカン (2006) に詳細に書かれているため本稿では割愛する。

第2に、エスノグラフィーの特徴として、研究対象となる集合体、そしてデータの社会文化的な分析と解釈があつて初めて成立するという (メリアム, 2004, pp.19-20)。特に、文化的文脈へのこだわり (民族学、文化人類学などが発端たる所以) こそが、質的調査法の他のタイプと区分している点に特徴を有する。すなわち、エスノグラフィーの基本的な考えとして、コミュニティの内側に入ることで、その「社会的文化的理解も可能」 (デンジン・リンカン, 2006, p.59) になることであるといえるだろう。

第3に、研究手法としてのエスノグラフィーである。エスノグラフィーは、一定の期間に研究者が対象の現場に直接参加をして観察を行い、対話やインタビューを行って集めたデータを質的に分析する手法である (中谷, 2020)。また、参与観察の特徴として「日常の生活状況や環境の「今ここ」を、調査と方法の基盤に据えること」 (p.176) を挙げている (フリック, 2004)。このようにエスノグラフィーは対象者の生活や周辺に入り込むことで、アンケート調査やインタビュー調査では反映

されない、「今ここ」にある対象者の思いや意図、無意識を描き出すことが可能であると考えられる。

ところで、体育科教育学の分野において、質的研究が流布したのは2000年以降と言っていだろうか (日本体育科教育学会, 2021)。では、エスノグラフィーという研究手法が体育科教育学においてどのように寄与しうるのだろうか。

これまで国内の体育科教育学における研究の多くは、1970年代以降、アメリカを中心として授業の実態を明らかにする「組織的観察法」などを始めとした数量的研究と呼ばれる手法で行われてきた (e.g., 高橋, 2015; 鈴木, 2015)。これらの数量的研究の開発や普及によって、期間記録法や相互作用行動観察法、学習者の学習事量や人間関係行動分析などが数量的研究手法として発展してきたのは周知の事実であろう (日本体育科教育学会, 2021)。一方、大友ら (2002) は体育科教育学における数量的研究手法の限界性として、次の3点を挙げている。第1に、一般的知見しか提供しなかったこと、第2に、体育授業の内容や文脈の一側面を切り取って数量的な理解ができて、全体的な授業の理解から離れていること、そして第3に、研究成果が体育授業実践に本当に有効であるかどうか、の3点である。これらの限界を克服できる方法が質的研究であると示唆されている (大友ら, 2002)。また高橋 (2015) も同様に、量的研究の限界性を指摘し、新たな質的研究の蓄積が必要であるということ述べている。さらに、秋田・藤江 (2019) は、体育科教育学における質的研究の例として、体育授業中における教師や子どもの発話や行為を対象としてデータを採取・記録したり、教師や子どもに対してインタビューを行ったりすることによって、得られた記述データをもとに分析していく研究方法を挙げている。

授業の構成要素を踏まえると、体育授業における研究の対象は、「児童・生徒」、「教材」、そして「教師」が考えられる。「児童・生徒」を取り巻く環境やその課題としては、「運動嫌い」「体育嫌い」「運動する子としない子の二極化」といったものが挙げられる (文部科学省, 2017)。そのような問題解決に向けて、様々なアプローチから研究が蓄積されつつあるのは言うまでもないであろう (e.g., 橋爪, 2016; 澤, 2017; 米津, 2017)。しかしながら、それらのような諸課題の解決に向けては、アンケート調査やインタビュー調査のみでは把握が難しく、対象者の学習習慣や生活スタイル、そして、その周辺に入り込むことで、「今ここ」

にある対象者の思いや意図、無意識を描き出すことが可能であるエスノグラフィーという研究手法の果たす役割は大きい(中谷, 2020)。そのため、子ども個人や教師に目を向けたエスノグラフィーを用いた研究は体育科教育学の質的研究をより豊かにしてくれる可能性がある。しかも、エスノグラフィーは従来の研究方法では見られなかった個人の内面や、考え方といった内在する課題に関して、解決の糸口となる可能性を秘めている。そのため、体育科教育学の研究方法の一つとして、エスノグラフィーに関して検討を重ねる意義は大いにあるといえる。

しかし、体育科教育学におけるエスノグラフィーを用いた先行研究は非常に少ない。

例えば、CiNiiで「体育 エスノグラフィー」と検索し、体育科とエスノグラフィーが関連する論文を検索した結果、4編(朝倉・清水, 2010; 成家・鈴木, 2017; 鈴木, 2018; 松本ら, 2009)しか見当たらなかった。

## 2. 研究の目的

そこで、本研究の目的は、日本の教育分野におけるエスノグラフィー研究の動向を整理・検討しながら、体育科教育学のエスノグラフィー研究の可能性について言及することである。具体的には、以下の2つの研究課題を設定した。

- (1) エスノグラフィーを用いた学校教育に関する文献をレビューすることにより、研究の対象や研究方法を整理し、研究動向に関する示唆を得る。
- (2) 先行研究の整理を通じた(1)の知見を踏まえながら、体育科教育学におけるエスノグラフィー研究の可能性を明らかにする。

なお、さまざまな「教育格差」<sup>注2)</sup>という文脈に埋め込まれている児童・生徒の実態に対して、エスノグラフィーを用いることで、体力格差や体育嫌い・運動嫌いなどの原因追究の可能性を探り、体育授業の改善や体育カリキュラムの発展にエスノグラフィー研究がどの程度寄与できるのかを示す一資料とする。

## 3. 研究方法

### 3.1. 対象論文の選定方法及び解釈の方法

本研究では、研究方法としてエスノグラフィーを用いた学術論文を対象にした。その際に、データベースであるCiNiiを用いて文献検索を行った。

まず、エスノグラフィーの先行研究を収集するための文献検索において、4段階に分けて対象文献を収集した(図1)。

第1に、「教育」と「エスノグラフィー」をキーワードに設定し、「教育 エスノグラフィー」でフリーワード検索を行った。これは、各教科で分けると文献数が少なくなり、教科間でのエスノグラフィーの比較だけでは難しいと判断したためである。なお、第1段階と同様に、ヒットした文献の中から、関係のないと思われる文献は除いた。その結果123編であった。

第2に、それぞれの教科教育の分野において、エスノグラフィーがどのように用いられているのかを調べるために、「エスノグラフィー」と「国語」、「数学」、「英語」、「理科」、「社会科」、「技術・家庭科」、「美術」、「音楽」、「体育」の各教科をキーワードに設定し、「エスノグラフィー 各教科」でフリーワード検索を行った。ヒットした文献の中から、エスノグラフィーが研究方法として用いられていないものや、学会資料・要旨等を除いた。結果として、国語2編、数学3編、英語2編、理科4編、社会科5編、技術・家庭科2編、音楽7編、美術2編、体育4編であった。

第3に、第2段階で収集した文献のうち、エスノグラフィーの観察対象として児童・生徒が含ま

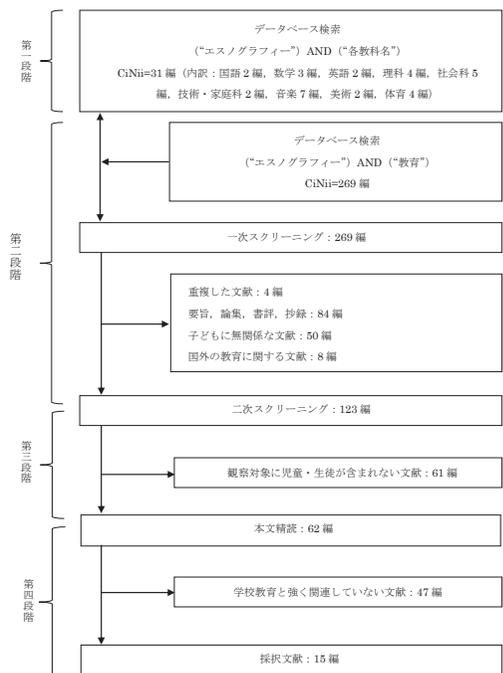


図1 文献採択の流れと選定の基準

れる文献を62編に絞った。絞った理由として、本研究の目的は体育科教育学におけるエスノグラフィー研究の可能性について検討することであるため、比較的関連性の高い小学生から高校生までを対象に含めた文献の方が、効果的に用いることができるかと判断したからである。

第4として、第3段階で絞った文献からさらに、学習塾の事例を対象とした文献、学校教育と強く関連がみられない文献を除いた。その理由としては、学校外におけるエスノグラフィー研究として、教員免許を持たない人物による児童・生徒への指導や、調査内容が教科教育の範囲から外れていること、そして、学習塾と学校の授業では学力の育成に対するアプローチに違いがあることがあげられ(早坂・杉森, 2018)、本研究の目的から大きく離れてしまうことを危惧したためである。その結果、学校における子どもを対象としたエスノグラフィー研究である15編を本研究の分析の対象とした。

### 3.2. 分析の枠組み

収集した15編の文献を整理するにあたり、Marco (2009) で用いられている比較フレームワークを援用した。比較フレームワークとは、教師教育のカリキュラムを比較するために、実際の教室における教師教育者と生徒の人間関係、大学における教師教育、教師教育が行われている社会環境をそれぞれマイクロ・メゾ・マクロの3つのレベルに分類したものである(Marco, 2009, p.12)。教師教育について研究しているMarco (2009) はその環境をマイクロ・メゾ・マクロに分け、それぞれについて述べていた。Marco (2009) の研究では、マクロ・メゾ・マイクロを政府・教育委員会・教師教育とし、分析の枠組みとしている。

そこで本研究では、学校における子どもを取り巻く環境に着目し、マイクロ=教師及び児童・生徒、メゾ=学校・授業、マクロ=社会・文化という3つのレベルに分け、本研究の分析の枠組みに設定し、文献を整理した。なお、これらの分類や分類の命名については、「内的妥当性」(メリアム, 2004) を高めるために、第1筆者(体育科教育学を専門とする大学教員1名)を中心として、共同研究者の大学院生5名と教育研究補助職員1名とで「仲間同士での検証」(メリアム, 2004, p.298) を実施した。

## 4. 結果と考察

表1は、本研究の対象となった15編の文献を、児童・生徒との関係性ごとに分類した結果を示している。「人間関係」に分類された文献は4編、「学校・授業」に分類された文献は6編、「社会・文化」に分類された文献は5編であった。それでは、分析の枠組みに沿って、具体的な結果と考察を論及していく。なお、上述している通り、「エスノグラフィー 体育」で調べると、体育科でエスノグラフィーが用いられている文献は全部で4編であった。また、「エスノグラフィー 教育」で文献レビューを行った結果、子どもを対象にした文献は全部で15編であった。

### 4.1. ミクロ・メゾ・マクロの視点による文献整理の解釈：15編の研究動向

15編の文献を整理した後、Marco (2009) が提唱するマイクロ・メゾ・マクロの枠組みを適用しながら、結果を解釈していくと以下の視点が明らかになった。

まず、マイクロの視点として「教師及び児童・生徒」についてである。この視点では、「教師及び児童・生徒」は対象の児童・生徒の学習や生活と大きく関わっている要素であり、互いに影響を与えあっている。また、授業は、多様な学習能力や興味・関心、個性をもつ児童・生徒が集団を組織して学ぶことから人間関係などの要素も授業に大きく影響している。例えば、教師の働きかけが児童・生徒の行動に直接影響を与えている場合(堀家, 2002) もあれば、反対に、岩崎(2001) が指摘するように、ある特定の児童・生徒の存在が、他者(他の児童・生徒や教師)、さらには、授業の在り方にも強く影響を与えているケースがある。

次に、メゾの視点として「学校・授業」についてである。「学校・授業」の視点が児童・生徒に大きな影響を与えていることはいうまでもない。同時に、多少ながら児童・生徒からの影響を受けていることが明らかとなった。学校には様々な特徴があり、児童・生徒は校則や学校の方針などによって影響を受けている。例えば、学校文化などによって、形成されるアイデンティティに差が生じることがある(竹石, 2001)。また、「特別扱いしない」という学校文化によって、貧困な状態にある児童・生徒への対処が充分できていないという現状がある(盛満, 2011)。他にも、荒木・美藤(2000) のように、図工科という教科自体が特性を持って

おり、授業が児童・生徒の成長に影響を与えている場合もある。

最後に、マクロの視点として「社会・文化」についてである。この視点では、「社会・文化」は児童・生徒を取り囲んでいるものであり、切り離すことはできず、常に影響を与えている。例えば、中国から日本へ帰国した児童・生徒が、日本との言語・文化の違いから周囲と馴染めず、加えて、性差や教室での座席関係で生徒同士の関わり方が変化するという結果がある(嶽肩, 1997)。また、中国から帰国した児童・生徒が文化の違いから日本での生活で困難な思いをするのに対し、その環境・社会を支援する取り組みがなされていないという結果が報告されている(藤井・田淵, 2001)。以上より、児童・生徒は環境や文化に内包された存在であり、一方的に影響を受けるのに対し、児童・生徒から周囲への働きかけは通らない関係性であるといえるだろう。

このように、エスノグラフィーを用いた教育に関する研究は、アンケート調査やインタビュー調査では測定が困難な児童・生徒のありのままをみとることによって進められている。また、倫理上尋ねることが憚られる内容や、直接的に尋ねることが難しいテーマに関して、児童・生徒の環境、つまり「その場」に入り込むことによってその原因や要因を明らかにしようとする研究であるといえる。

#### 4.2. 体育科教育学におけるエスノグラフィーの研究動向とその可能性

次に、児童・生徒を対象とした15編の文献から、体育に立ち返って言及できることは何であるかについて考察していく。分析の結果、「エスノグラフィー 体育」でヒットした4編の特徴としては、主に体育教師に焦点を当て、過去の経験や信念など今まで明らかにされていなかったものを対象としている。

例えば、朝倉・清水(2010)は、信念という概念を用いて、どのような要因が体育教師の行動に繋がっているのかを検討した。また、成家・鈴木(2017)は、体育に関する組織文化に着目し、その再形成における教師間の細かい関わりを明らかにした。さらに、鈴木(2018)は、授業者と研究者という2つの立場を経験している筆者の視点から、過去の自分の授業実践を懐古的に振り返っていた。その結果、日頃の体育授業の実践における何気ない児童・生徒の学びを映す日常を描き出す

ことができた。加えて、体育教師に焦点を当てた論文の他に、松本ら(2009)は、体育で取り扱うべきかどうか疑問視されてきた体ほぐし運動の価値について指摘している。このように、体育科教育学の分野では、エスノグラフィーを用いることで、児童・生徒と教師の関係性、とりわけ教師に力点が置かれていながら研究がされている傾向にある。

翻って、質問紙調査やインタビューといった従来の研究方法は、客観性、標準化、数量化を理想化する傾向があるために、現場の内実からは遠ざかっていくことが懸念されている(小田, 2010)。そこで、発想の転換として、エスノグラフィーが挙げられる。エスノグラフィーは、現場の性質にフィットし、現場で得られた具体的な事象に密着しながら考察を展開していくことを可能とする。また、エスノグラフィーは、信頼関係を築いた(相手のことを良く知ることができる)状況を作っておくことで、児童・生徒に直接聞かなくても、態度や他の言葉などの周辺要素から、感情や思っていることを引き出すことができるという特徴を持っている(箕浦ら, 1999b)。また、先で述べた結果にあるミクロに分類された文献からもわかるように、児童・生徒を取り巻く人間関係(「教師及び児童・生徒」の視点)は児童・生徒の内面を映し出す鏡のような役割を担っている(岩崎, 2001; 藤井・田淵, 2001)。つまり、エスノグラフィーを用いて、直接調査しづらい児童・生徒の周辺を見ることができるといえるだろう。

以上のような現況を鑑み、エスノグラフィーは従来の研究手法では見ることの難しい体育の新たな側面を描き出す可能性を秘めている。しかし、本研究の結果として、体育科教育学の分野において、エスノグラフィーを用いた研究は少ない。そこで、エスノグラフィーという研究手法を用いることは、体育科教育学の分野において従来の方法では解決が困難であった課題を解決する一つの糸口となり、数量的研究の限界(大友ほか, 2002)を乗り越えるための一助になりえるといえるだろう。

なお、エスノグラフィーは、図書館の価値を検討した渡辺・滝口(2012)や統合教育の可能性について検討した堀家(2002)などの先行研究において、すでに存在している「概念」や、「モノの価値や可能性」を再評価、再分析するための方法としても用いられていることも付記しておく。

## 5. 総括と今後の展望

本研究の目的は、日本の教育分野におけるエスノグラフィー研究の動向を整理・検討しながら、体育科教育学におけるエスノグラフィー研究の可能性について検討することであった。文献レビューの結果から以下のことが明らかとなった。

第1に、教育におけるエスノグラフィーという手法は、児童・生徒を対象に、ミクロなレベルからマクロなレベルまで幅広く児童・生徒に関する出来事を明らかにするために適用されていることが明らかとなった。具体的には、「教師及び児童・生徒」・「他の児童・生徒との関係」というミクロレベル、「児童・生徒と学校」というメゾレベル、「児童・生徒と地域・社会」というマクロレベルという視点から、児童・生徒がどのように関わっているか、児童・生徒の困りごとやその要因を各視点から質的に解明するものであった。

第2に、エスノグラフィーという手法は、体育科教育学において、体力格差や運動への興味関心の格差など、教育格差といった可視化されづらい問題に対し、学問的な側面からアプローチをかけることができる手法だといえる。エスノグラフィーという研究手法を体育科教育学に用いることで、児童・生徒が体育嫌いや運動嫌いになる根本的な原因を探ることや、体育において、男女二元論で語られたくない児童・生徒の対応など、表面化されづらい困り事を、児童・生徒を観察・分析することで明らかにすることができる。「社会正義」(岩田ら, 2021) が重んじられる現代において、「教育格差」や語られなかった問題などを詳らかにし、解決することは、体育科だけではなく教育そのものの公平性や平等につながると考えられる。

以上のように、エスノグラフィーという研究方法は、先行研究で培われた知見や常識にこれまでと異なる角度からアプローチできたり、従来の質的研究では触れることが難しかったデリケートな問題などに深く迫ることができたりする可能性を秘めている。すなわち、今後の体育科教育学の分野において、エスノグラフィーという研究手法を用いることは、これまで露見してきた課題点を別の視点から問い直し、従来の方法では解決出来なかった課題を解決することにつながるといえるだろう。

しかし、その一方で、エスノグラフィーという研究手法の特性上、観察者の力量で結果や考察の質が左右されるため、調査結果が単なる体験談に

終わってしまうという恐れやそのような手法自体への批判もある(e.g., 黒田, 2011; 箕浦, 1999a)。このような点がエスノグラフィーの弱点でもあり、限界性を示すものでもある。したがって、エスノグラフィーの特質や具体的な手法を熟知しながら、他の調査方法との検討の中で用いる必要があるだろう。

最後に、エスノグラフィーは体育科教育学が抱えている課題や、触れることのできなかつた事象を探るための一つの道標になり得るため、さらなる検討を重ねていく必要があるであろう。

<注>

- 1) 岩川 (1989) は、Delamont & Hamilton の数量的分析の限界の指摘と同時に、「(1) データが収集された文脈を無視している。(2) 顕在的で観察可能な行動のみをデータとしている。(3) カテゴリーによって、質的な特徴が歪められてしまう。(4) 全体的な概念より小単位の行動に焦点を当てている。(5) カテゴリーが予め決定されているために説明の可能性が閉ざされている。(6) カテゴリーシステムが回避しがたい初発のバイアスを創り出し、授業のリアリティを静態的な表現に閉じ込めてしまう。」(p.291) を紹介している。
- 2) 「教育格差」とは、橘木 (2020) によると「結果の格差」と「機会の格差」に2つの視点に区分している。前者は、所得や資産の分布における格差、つまり「人々が経済活動を行った末に生じる貧富の差」(p.16) である。一方、後者は、学校の学習環境や家庭の経済状況によって、児童・生徒の教育のどこまで受けられるのかといった不平等でない状態である (橘木, 2020, pp.16-19)。

表1 選定された教育分野におけるエスノグラフィック研究 (15編) の文献レビューの概要

著者	年	タイトル	教科	研究方法	対象	目的	結果
荒木紀幸・ 美藤正人	2000	小学生の自尊感情育成に関する研究—図工科学習におけるエスノグラフィックな分析を通して見えてきたもの—	図工	参与観察, インタビュー	小学校6年生32名	自尊感情を発達させたものの知見を得る	図工は他の教科と比較し、児童一人一人と会話することが可能であり、教師からの授業内での接触回数によって自尊心が変化していた。
岩崎浩	2001	数学の授業における相互作用と学習との間の関係に関する考察—人の生徒からみた授業がもつ社会的側面の意味—	数学	参与観察, インタビュー	授業, 授業で中心に発言していた6名の生徒 (インタビュー対象)	教師と子どもたちの相互作用, 授業がもつ社会的側面を理解する	対象の生徒Aは生徒Bに教えることで、相互的に数学的理解を深めた。また、生徒Aの「発言しながら考える」行為は、自身だけでなく、周囲の生徒の数学的理解を深めることに貢献した。これはこの教室のマイクログルチチャーの出現であり、教室のマイクログルチチャーと数学的知識は、相互に関係している。
藤井健太・ 田淵五十生	2001	中国帰国者3世児童・生徒の生活と教育課題—4人の子どものエスノグラフィックを通して—	なし	参与観察 (フィールドノート)	中国帰国者3世の児童・生徒, 日本語指導巡回講師, 両親, 学校の先生	中国帰国者の生活と教育課題を明らかにする	学校教師や来日した日本語教師とのデイスカッションから得られたデータを基に、帰国子女3世の環境を描き出すと、学校環境や日常生活において適切な教育支援がなされていない。今後増え続けるであろう帰国子女に対する適切な教育実践を提案する必要がある。
渡辺暁雄・ 滝口克典	2012	学校図書館の教育実践—山形北高「図書館講座」のエスノグラフィック—	なし	参与観察, 生徒のレポート, インタビュー	生徒, 図書館講座	《学校図書館の教育実践》がもつ独自の意義や価値について、実践事例をもとに明らかにする	提供者である学校側の意図—「受験対策」など一歩をはるかに超えて、さまざまな知識や情報、気づきや動機づけ、自己肯定や達成感、そして新しい人間関係のきっかけなどを生徒の人びとのうちに生み出しているということであった。
竹石聖子	2001	生徒集団の形成と諸実践—女子高のエスノグラフィック—	総合	インタビュー	教員, 高校生	(1) 学校文化 (2) 1年生と3年生の違い (3) アイデンティティがどのよう形成されるのかを明らかにする	対象校を1つの実践共同体と捉えることで、入学した直後は学校の文化に戸惑いがあるものも、3年生になるにつれ、他者との関わりや学校行事を経て次第に学校固有のアイデンティティを獲得するプロセスがある。
堀家由妃代	2002	小学校における統合教育実践のエスノグラフィック	なし	参与観察, インタビュー	小学4年生, 健司, 教員	(1) 教室のなかでの障害児のカテゴリー化がどのように行われるか (2) 子どもの障害がいかに生み出されるか, (3) 2点を明らかにする	教師と障害児健司との相互作用において、2つのストラテジー「回避」「可視化」により、健司は社会的不利益を被っていないことがわかった。そこから障害児の存在は、その場の状況やそこにいる人の認識によって規定されるということが明らかとなった。

著者	年	タイトル	教科	研究方法	対象	目的	結果
島田和典・森山潤	2012	工業高校生の自己概念の変容・形成過程の縦断的事例検討—入学から卒業までのエスノグラフィ—を通して—教室空間における児童・生徒の関係性についての—考察—いじめの根幹を探るエスノグラフィ—	なし	アンケートの参与観察、インタビュー	工業高校の生徒	生徒の自己概念の変容・形成過程を縦断的に検討する	3年間を通して自己概念の変容が見られた学生は、学校適応状況や将来の自己像の変化に対してが契機であり、これらの現象的な変化に対して、教員がサポートする重要性は高い。
高橋利彰	2014	休息時間を超え学校図書館の機能—書架によって創出される居方における居方に着目して—	なし	参与観察、質問紙調査	小学5年生(給食時間)	いじめの持つ曖昧さへのアプローチから明らかにする	子どもの関係性に注目をしたときに、教室の中では子どもたちの世界が重なり合いながら、お互いに関わり合い生活をしている。
新居池津子	2019	通学型の通信制高校において生徒の自己開示はどのようなように実現しているのか—“教師—生徒”関係に着目して—	なし	参与観察、インタビュー	中学生474名	中学生が過ごす昼休み時間の図書館の機能の全体構造を明らかにする	図書館は、書架との関係により1つの館内に、同時多発的に、中学生が過ごす場所と居方の選択が複数提示されることから、学内の1つのセーフティネットの役割を果たしている。
川村博子・高野美雪	2021	学校の教室における中国帰国生徒Aのエスノグラフィ—対人関係に焦点を当てて—	なし	参与観察、インタビュー	教員、高校生	教師・生徒間のかかわりと生徒の自己開示の関連性について分析する	教師—生徒の関わりに関するエピソードは15あり、そのうち〈会話〉(距離感—関係性)〈教師のケア〉の3つのカテゴリ—から構成されていたものは13あった。これらのカテゴリ—から構成されるエピソードにより、生徒の自己開示は進むことになる。
嶽肩志江	1997	学校の教室における中国帰国生徒Aのエスノグラフィ—対人関係に焦点を当てて—	なし	参与観察、インタビュー	中国帰国生徒A、保護者、教師	帰国して間もなく高校へ進学した三世の帰国子女生徒Aを対象に、以下のことを明らかにする(1) 学校の中でどのような対人関係を構築するのか(2) その問題の要因	Aの対人関係は限定的であり、働きかけがないと同年代の一般生徒との関係はなかなか深まらない。また、「言葉の問題」に関して帰国生徒側の変化を求める傾向が見られる。他の生徒とのコミュニケーションの契機として教室の座席や性差への配慮は有効である。
池田曜子・渋谷真樹	2003	学校における資源の活用と友人グループ—小学校でのエスノグラフィ—を通して	なし	参与観察、インタビュー	小学校3年生(参与観察)、インタビュー(教員)	子どもの持つどのような財産が友人グループにとって価値があり資源とされるのか、もしくは価値が認められず資源とされないのかを明らかにする	友人グループ間には力関係が存在し、それは子どもたちの積極性や自信に影響している。また、友人グループは、その構成員に対して同質性獲得を促す機能がある。このことから、子どもたちは友人グループの中で、新たに資源を獲得する可能性があることがうかがえた。

著者	年	タイトル	教科	研究方法	対象	目的	結果
盛満弥生	2011	学校における貧困の表れとその不可視化—生活保護世帯出身生徒の学校を事例に—	なし	参与観察, 教師インタビュー, 子どもデータ	生活保護世帯出身子ども	教師の差別的まなざしや「特別扱いしない」学校文化の中で、貧困の問題はどのように立ち現われ、それを教師はどう認識し、対処しているのかを明らかにする	対象生徒の半数近くが「脱落型」の不登校を経験し、毎日学校に通えている生徒についても、学習資源の不足が直接的に影響し低学力に陥っていた。また、就職を強く意識するあまり、将来の夢を自由に描くことができていない様子がうかがえた。
藤原瑞穂, 小西かおる	2012	在学したまま妊娠を継続する女子高校生の心理についてのエスノグラフィ—学校と地域への面接調査から—	なし	半構造化インタビュー	高等学校の教諭, 保健センターの保健師, 助産師	妊娠を継続する女子高校生の心理についての明らかなる	妊娠を継続する女子高校生の心理は、《未熟さゆえに起こる危うい判断や行動》を繰り返す、妊娠という現実によって《頼らざるを得ない自分の親との直面》に苦しみ、《学校を続ける上での試練》に立ち向かいながらも、《母になる期待と不安の狭間》の中で揺れ動く。
野垣内菜穂・笹野恵理子	2012	高校生の部活動にみる音楽活動の形成過程：高等学校における軽音楽部のエスノグラフィを通して	なし	参与観察, インタビュー, フォーマルインタビュー	中学生（音楽部）	音楽活動の形成過程を考察する	生徒の音楽活動を形成・維持するのは、音楽達成欲求でなく人間関係達成欲求が大きな割合を占めている。人間関係達成欲求が強い場合は、音楽活動を維持することができ、また活動の中で音楽達成欲求を高めていくことができる。

<引用・参考文献>

1. 秋田喜代美・藤江康彦 (2019) 理論編. 秋田喜代美・藤江康彦編, これからの質的研究法-15の事例にみる学校教育実践研究-. 東京図書: 東京, 2-39.
2. 阿部真大 (2006) バイク便ライダーのエスノグラフィー-危険労働にはまる若者たち-. ソシオロギス, 29: 215-231.
3. 新居池津子 (2020) 昼休み時間を過ごす中学生から捉える学校図書館の機能:-書架によって創出される場所における居方に着目して-. 日本図書館情報学会誌, 66 (1): 1-18.
4. 荒木紀幸・美藤正人 (2000) 小学生の自尊感情育成に関する研究-図工学習におけるエスノグラフィックな分析を通して見えてきたもの-. 兵庫教育大学教科教育学会紀要, (13): 6-15.
5. 朝倉雅史・清水紀宏 (2010) 体育教師の信念に関するエスノグラフィー研究. 体育・スポーツ経営学研究, 24: 25-46.
6. Delamont, S.& Hamilton, D. (1976) Classroom research: A critique and a new approach, in Stubbs, M. & Delamont, S. (eds) Explorations in Classroom Observation, John Wiley & Sons.
7. デンジン・N・K, リンカン, Y・S 編 (2006) 質的研究ハンドブック 1 巻質的研究のパラダイムと眺望. 北大路書房: 京都.
8. 藤井健太・田渕五十生 (2001) 中国帰国者3世児童・生徒と教育課題-4人の子ども達のエスノグラフィーを通して-. 奈良教育大学紀要, 50 (1): 1-16.
9. 藤原瑞穂・小西かおる (2021) 在学したまま妊娠を継続する女子高校生の心理についてのエスノグラフィー-学校と地域の専門職への面接調査から-. 日本健康相談活動学会誌, 7 (1), 61-70.
10. 橋爪千尋 (2016) 運動する楽しさを実感させる保健体育科授業-『わかる・できる・かかわる』を重視した活動を取り入れて-. 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, 7: 181-190.
11. 橋本剛幸・永浜明子 (2013) 生涯スポーツにつながる小学校, 中学校, 高等学校の体育カリキュラムの研究-スポーツの楽しさを重視した授業を目指して- (生徒のアンケート分析から). 大阪教育大学紀要第V部門, 61 (2): 61-72.
12. 早坂めぐみ・杉森伸吉 (2018) 学校と学習塾における授業比較-学習者の視点に着目して-. 東京学芸大学紀要, 69(0): 509-518.
13. 堀家由妃代 (2002) 小学校における統合教室実践のエスノグラフィー. 東京大学大学院研究科紀要, 42: 337-348.
14. 池田曜子・渋谷真樹 (2003) 学級における資源の活用と友人グループ-小学校でのエスノグラフィーを通して-. 教育実践総合センター研究紀要, (12): 61-70.
15. 岩川直樹 (1990) 授業における相互作用の質的研究: 詩の授業における<子供のテキストとの相互作用>と<教師の子供との相互作用>. 東京大学教育学部紀要, 29: 287-296.
16. 岩崎浩 (2001) 数学の授業における相互作用と学習との間の関係に関する考察-一人の生徒からみた授業がもつ社会的側面の意味-. 数学教育学研究: 全国数学教育学会誌, 7 (0): 51-67.
17. 岩田昌太郎・大城穂乃香・磯村美菜子・松本ミユ・村上遥菜・教敦其其格・濱本想子 (2021) 子どもの「格差」問題へ「社会正義」を志向する保健体育はいかに貢献するか. 学校教育実践学研究, 27: 65-73.
18. 川村博子・高野美雪 (2021) 通信型の通信制高校において生徒は自己表現をどのように実現しているのか-「教師-生徒」の関係に着目して-. 教育・心理福祉研究紀要論文集, (20): 55-63.
19. 黒田由彦 (2011) エスノグラフィー的方法的特質とは何か-社会学の立場から考える-. 看護研究, 44 (5): 530-535.
20. LeCompte, M.D.& Preissle, J (1993) Ethnography and Qualitative Design in Educational Research (2nd edition) .San Diego: Academic Press.
21. 松本菜緒・熊谷青士・平野真 (2009) 身体ほぐしの運動における交流に関する事例研究-活動を通しての抽出児の変容を中心に-. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 31: 41-59.
22. Marco Snoek (2009) Teacher Educator in Europe ; Main Characteristics and

- Developments. In Anja Swennen & Maecel van der Klink (Eds.) *Becoming a Teacher Educator ; Theory and Practice for Teacher Educators*. Springer : pp.11-28.
23. メリアム・堀薫夫ほか訳 (2004) 質的調査法入門-教育における調査法とケース・スタディ-. ミネルヴァ書房：東京.
  24. 箕浦康子 (1999a) エスノグラフィーの作成. 箕浦康子 (編著) フィールドワークの技法と実際. ミネルヴァ書房：東京, pp.71-86.
  25. 箕浦康子 (1999b) フィールドワーク前期. 箕浦康子 (編著) フィールドワークの技法と実際. ミネルヴァ書房：東京, pp. 46-48.
  26. 盛満弥生 (2011) 学校における貧困の表れとその不可視化-生活保護世帯出身生徒の学校生活を事例に-. 教育社会学研究, 88 (0) : 273-294.
  27. 村本由紀子 (2006) 心と社会を研究する方法. 吉田寿夫 (編) 心理学研究法の新しい形, 誠信書房：東京, pp.221-243.
  28. 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説.  
[https://www.mext.go.jp/content/20210113-mxt\\_kyoiku01-100002608\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210113-mxt_kyoiku01-100002608_1.pdf), (参照日：2021 年 12 月 15 日).
  29. 中谷安男 (2020) オックスフォード・ユニオンと大学のディベート組織におけるエスノグラフィー調査-世界のリーダーを輩出するシステム-. 経済志林, 88 (1・2) : 125-157.
  30. 成家篤史・鈴木直樹 (2017) 組織文化の再形成における教師間の関わり-揺らぎと安定の狭間で-. 学校教育学研究論集 (36) : 77-90.
  31. 日本体育科教育学会 (2021) 体育科教育学研究ハンドブック. 大修館書店：東京, 46-52.
  32. 野垣内菜穂・笹野恵理子 (2012) 高校生の部活動にみる音楽活動の形成過程-高等学校における軽音楽部のエスノグラフィーを通して-. 学校音楽教育研究, 16 (0) : 25-36.
  33. 小田博志 (2010) エスノグラフィー入門-現場を質的研究する-. 春秋社：東京, 8-9.
  34. 大友智・吉野聡・高橋健夫・岡出美則・深見英一郎・細越淳二 (2002) 米国における質的体育授業研究の「目的」及び「方法」の特徴- JTPE 誌の研究例の分析から-. スポーツ教育学研究, 22 (2) : 93-113.
  35. 佐藤郁哉著 (1984) 暴走族のエスノグラフィー-モードの叛乱と文化の呪縛-. 新曜社：東京.
  36. 澤聡美 (2017) 楽しい体育授業の満足度に影響する要因. 人間発達科学部紀要, 11 (3) : 31-37.
  37. 柴田真琴 (2006) 子どものエスノグラフィー入門. 新曜社：東京.
  38. 島田和典・森山潤 (2012) 工業高校生の自己概念の変容・形成過程の縦断的事例検討-入学から卒業までのエスノグラフィーを通して-. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 34 (2), 207-222.
  39. 志水宏吉 (1985) 「新しい教育社会学」その後-解釈的アプローチの再評価-. 教育社会学研究, 40 : 193-207.
  40. Spradley, J.P. (1980) *Participant Observation*. Orlando: Harcourt Brace Jovanovich College Publishers.
  41. 鈴木一成 (2018) 語られなかった体育の「主体的な学び」の検討-自己エスノグラフィーを参考にして-. 愛知教育大学研究報告. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編 67 (2), 35-40.
  42. 鈴木理 (2015) 質的研究の成果と課題. 岡出美則ほか編, 新版体育科教育学の現在. 創文企画：東京, 256-268.
  43. 高橋健夫・岡出美則・長谷川悦示 (2005) 体育学研究における体育科教育学研究の成果と課題. 体育学研究, 50 : 359-368.
  44. 高橋健夫 (2015) 体育科教育学の発展過程. 岡出美則ほか編, 新版体育科教育学の現在. 創文企画：東京, p.227-241.
  45. 高橋利彰 (2014) 教室空間における児童・生徒の関係性についての-考察-いじめの根幹を探るエスノグラフィー-. 滋賀大学大学院教育学研究科論文集 (17) : 11-18.
  46. 高瀬淳也・石田譲 (2008) 体育授業を通して運動有能感を高める事例研究. 北海道教育大学釧路校研究紀要, 40 : 151-155.
  47. 竹石聖子 (2001) 生徒集団の形成と諸実践-女子高のエスノグラフィー-. 教育科学研究,

- (18) : 1-11.
48. 嶽肩志江 (1997) 学校の教室における中国帰国生徒 A のエスノグラフィー-対人関係に焦点をあてて-. 言語文化と日本語教育, 13 : 50-66.
  49. 橋木俊詔 (2020) 教育格差の経済学 何が子どもの将来を決めるのか. NHK 出版新書.
  50. 上田敏丈・原三智子・中坪史典 (2001) 統合保育場面における障害児のエスノグラフィー-障害の程度の異なる 2 人の幼児に着目して-. 乳幼児教育学研究 (10) : 11-20.
  51. ウヴェ・フリック : 小田博ほか訳 (2004) 質的研究入門-<人間の科学>のための方法論 (第 8 刷). 春秋社 : 東京.
  52. 米津光治 (2017) 日本の学校体育の変遷と課題. 生活科学研究, 39 (0) : 173-182.
  53. 渡辺暁雄・滝口克典 (2012) 学校図書館の教育実践-山形北高「図書館講座」のエスノグラフィー-. 東北公益文科大学総合研究論集 (22) : 107-137.